2023.5.31

資料室だより　１４６

ヴリーゲン蔵書（6）

ヴリーゲン氏の寄贈書の中の１冊「Jean Calvin et Pseaumes de David; Documenta musicologica　カルヴァン音楽論と詩篇歌の歴史」（基督教音楽出版、1959）はハッチハウスの”ヴリーゲン文庫“ではなく資料室の聖歌の棚に置いて管理することにします。というのは辻壮一先生寄贈による「Calvin's first Psalter」の続編と考えられるからです。
https://st-gregorio.or.jp/wp-ontent/uploads/2018/06/library_Soichi_Tsuji_Bunko_006.pdf
両者とも木岡英三郎氏による出版ではありますが書誌事項を見る限りシリーズとしての連続性は確定できません。しかし内容的に明らかに対をなすものですので一緒にして利用に供したいと思います。

木岡先生はこの著書をエリザベト音楽大学の初代学長ゴーセンス師に捧げておられます。「広島平和大聖堂と大オルガンを記念して」と献辞があり、彼が広島出身であることも述べられています。事情は詳らかではありませんが木岡先生は晩年カトリックに改宗され、聖イグナチオ教会、関口教会（東京カテドラル）のオルガニストを勤められています。イェール大学に留学後、渡仏してヴィドールにオルガンを師事し、日本におけるオルガニストの草分けとなった方です。オルガンだけではなくこのように教会聖歌の研究、また出版に精力的に取り組み日本における教会音楽家のパイオニアと言えましょう。

「日本宣教 100 年、カルヴァン生誕 450 年、新教二世紀の改革讃美歌をたずねて」と表紙に記されており、この書はすみずみまで木岡先生の教会音楽に対する情熱が迸っております。まずタイトルページの前に聖歌集の 1541 年のファクシミリが掲げられ「最も美わしいコラール集」と但し書きがあります。序文の一部を引用します。なお、新教と呼んでいるのはプロテスタント教会のことです。「…大多数の日本新教諸教会と全信徒が百年間、カルヴァンの心、そのまことの姿と性格、また神学でもあった詩篇歌の真相について皆目無知であったことはなんとしても悲劇の悲劇、限りない痛恨事と悲しまれるものがあります。」「神学と音楽に、一致と等しい尊厳を見貫く霊智があり、熱い愛情と最も完璧な表現力を残した改革者たちは詩と賛美と霊のうたの聖化、霊智、そしてその救いを号叫しています。自らと日本民族の永遠の救いとその歌が叫び求められ、見出されるようにと！！！」

この前号が聖歌のオリジナル版と日本語版だったのに対し、この巻はカルヴァンの音楽論、ジュネーヴ詩編から英国国教会への流入、カルヴァンの詩編の和声的、対位法的考察、音楽史に果たした役割、オルガン曲との関連など広く論じられています。よくない讃美歌に関しては「霊魂を八つ裂きにする歌」、と激しい戒めをしています。

会衆賛歌の原点を考察するとき、この２冊は大いに示唆を与えてくれるはずです。

（杉本ゆり　記）